

柏舟社の活動—木村定三コレクションにふれて

上蘭四郎(笠岡市立竹喬美術館館長)

はじめに

「柏舟社」は、京都の日本画家たちが昭和13年(1938)に結成した小規模団体である。土田麦僊(1887～1936)門下の伊藤仁三郎(1905～2001)、梅原藤坡(1904～1980)、要樹平(1906～1994)、澤田石民(1905～1944)、新見虚舟(1904

～1995)、林司馬(1906～1986)の6人(挿図1)が、昭和11年(1936)6月10日の麦僊死去を受け、京都市立絵画専門学校出身の同世代として集い、麦僊塾(山南塾)の後継として結成した。昭和14年(1939)1月に第1回展を開催してから、戦死した石民の追悼展を兼ねた最後の展覧会を開催する昭和22年(1937)5月まで活動している。

さて、平成20年(2008)8月、思いもかけない問い合わせが愛知県美術館から笠岡市立竹喬美術館へ寄せられた。木村定三コレクション

に含まれる、梅原藤坡、澤田石民、林司馬の作品についてである。資料を見るといずれの作品もこれらの画家の柏舟社時代のものであった。この小文は、木村定三コレクションの柏舟社関連作品を解説するのが主眼である。しかしながら、柏舟社そのものの存在が認知されていない状況を痛感するので、この団体の活動を概説した上で、本題に入りたい。まずは、柏舟社をめぐるこれまでの経緯を述べておきたい。

(1)これまでの経緯

竹喬美術館は昭和58年(1983)から3カ年、国画創作協会を検証する「国画創作協会の歩みⅠ～Ⅲ」展を実施した。また、国展の後継団体であった新樹社については、平成2年(1990)に「新樹社の画家たち—国画創作協会の残英—」展を開いた。この時期にはまだ、実際に国展に出品した日本画家が複数存命であったので、可能な限り聞き取り調査を行った。その中で、昭和60年(1985)頃、国展に対する熱い思いを語った一人に名古屋出身の新見虚舟がいた。



挿図1 柏舟社第1回日本画展の会場にて 銀座松坂屋 昭和14年1月
(向かって左より、伊藤仁三郎、要樹平、林司馬、梅原藤坡、
新見虚舟、澤田石民)

虚舟は、「ようやく来てくれたか。私の国展時代について聞ってくれる美術関係者がいないので、家にある国展や新樹社の作品を燃やしてしまうと思っていた」と語った。そして、まぐりの状態にあった昭和2年(1927)の第6回国展入選《海苔干す早春》と同3年(1928)の第7回国展入選《漁港》、さらに軸装の同5年(1930)の第2回新樹社展《鯛》を見せた。これらの作品はその後京都国立近代美術館の所蔵となり、新見虚舟の存在を近代日本画史に残すことに貢献した。

この折に、虚舟は柏舟社という小団体についても深い感慨を込めて、「昭和3年に国展が解散して、そのあとすぐに帝展や院展に参入する試作展の新樹社ができて、国展に参加していた若い画家たちの多くは帝展に入っていた。その後、麦僊先生の山南塾展も活発に開かれて順調にやっていた。しかし、昭和11年に麦僊先生が急死されて、私たち塾生は路頭に迷った。そして、絵専で年の近かった伊藤仁三郎、梅原藤坡、要樹平、澤田石民、そして林司馬たちと柏舟社を結成した。国展の設立精神を継承して、二度と公募展には出品しないと誓って出発したが、自分は戦後日展に一回だけだが出品してしまった。その後、洋画に転じて自由美術に出品を続けた。ほかの連中は、麦僊先生に操を立てたのに自分は情けない限りだ。しかも、才能のない自分が今日まで生き残り、最も絵が巧かった石民が戦死してしまったのは、不思議な巡り合わせだ」と語った。この後虚舟は竹喬美術館をたびたび訪れ、また書信を寄せ、柏舟社に関する詳細な情報を伝えた。その中で柏舟社の諸資料を集めたスクラップブックを提供され、これが今回別項に纏めた柏舟社と〈三三美術団〉の展覧会歴の基礎資料となった。

虚舟から得たさまざまな情報や資料は、その後に林司馬の遺族よりの寄せられた資料と作品で拡充され、平成5年(1993)の「国画創作協会の名手 林司馬」展、さらに平成10年(1998)の「国画創作協会の逸材 澤田石民」展の開催へと繋がっていった。また、石民展を開催した時期に、京都市中の日本画商の店先に柏舟社の画家たちの小品がまとまって並ぶようになった。多くが柏舟社時代のもので、資料的価値があり、しかも廉価であったために、竹喬美術館がそのほとんどを購入した。この数度にわたる購入の噂が、梅原藤坡の遺族に伝わり、藤坡作品が一括寄贈されることとなる。石民の作品も展覧会出品の主要作品が遺族より寄贈された。このような展開により、柏舟社関係の収蔵品が一つのコレクションを形成することとなり、修復や表装を経て、平成15年(2003)に「新収蔵品を中心とする 柏舟社の画家たち展」という成果を生んだ。そしてまた、この企画を機縁に、伊藤仁三郎と新見虚舟の遺族からも寄贈が相次いだ。

このような経過のなかで、残念なこともあった。それは、要樹平が自らの戦前の画業を全面的に否定していたために、聞き取り調査において国展、新樹

社、帝展、柏舟社の各時代についての話を全くうかがえなかったことだ。またこれらの時代の作品を全く残していなかった。国展や帝展への入選歴は柏舟社のメンバーの中でも一頭地抜きでた印象があるのに、何も語ろうとしなかった。その理由もうかがえなかったが、美術市場においても樹平の柏舟社時代の作品を見かけることはほとんどなく、その結果、竹喬美術館が収蔵する樹平作品はわずかである。

竹喬美術館における柏舟社の画家たちに関する小企画展はその後も続いたが、いまだに全貌を紹介する展覧会は開かれていない。これは一つの課題として残っている。

(2) 柏舟社を結成した画家たち

さて、この柏舟社を結成した6人の関係と事前の経歴について述べておく。

伊藤仁三郎、要樹平、澤田石民、林司馬の4人は、昭和2年(1927)3月に、そして梅原藤坡と新見虚舟は同3年(1928)3月に京都市立絵画専門学校(絵専)を卒業した。生年も明治37年(1904)から同39年(1906)の間のほぼ同世代であり、絵専同期という意識があったようだ。国画創作協会を設立した土田麦僊ら5人が絵専第一期生であったことを多分に意識して、彼らは柏舟社を設立したと思われる。

生年順に経歴を追うと、まず新見虚舟は明治37年(1904)4月26日に名古屋市に生まれる。本名孝。昭和3年(1928)に絵専卒業。絵専在学中の昭和2年(1927)、第6回国展に《海苔干す早春》が入選の後、翌年の第7回国展に《漁港》と《市の立つ日》が入選する。日本画家としてキュビズムの影響を強く示す。国展解散後、昭和4年(1929)の第1回新樹社展に《筍》、翌年の第2回新樹社展に《鮎》を出品する。宋元絵画の線表現に倣う。この頃に土田麦僊に師事。昭和9年(1934)の第15回帝展に《給桑》が、昭和11年(1936)の改組第1回帝展には《朝餉の白川女》が入選する。伝統的な題材をもとにモダンな女性表現を目指した。

梅原藤坡は明治37年(1904)12月3日、京都市に生まれ東京で育つ。本名藤次郎。大正14年(1925)国画創作協会春季展に《石峰寺の春(素描)》《風景》が入選する。昭和3年(1928)絵専を卒業し、研究科に進む。同年の第7回国展では《円山公園》が落選。絵専卒業制作《三味線ひく少女》などデカダンな傾向も示した。昭和5年(1930)の第2回聖徳太子奉讃展に《夏樹讃頌》を出品。昭和6年(1931)の第12回帝展に《水辺首夏》が、同11年(1936)の改組第1回帝展に《木立》が入選する。緑色を効果的に用いた丁寧な樹木表現を示す。昭和8年(1933)頃には入江波光の指導を受けるが、その後は土田麦僊に師事する。

澤田石民は明治38年(1905)3月15日、現在の京都府京丹波町に生まれる。

本名實。大正13年(1924)3月に京都市立美術工芸学校(美工)を卒業し、4月絵専に入学。美工卒業制作の《御苑内》は色彩感覚に高い資質を示した。絵専在学中に土田麦僊に師事し、入江波光や福田平八郎の指導も受ける。大正14年(1925)の国画創作協会第1回春季展に《風景》が入選して以後、翌年の第5回国展に《風景》、昭和2年(1927)の第6回国展に《風景》、同3年(1928)の第7回国展に《風景》が連続入選する。これらは緻密な立体表現の中に寂然とした精神性の高さを示すものであった。以後、昭和3年の第9回帝展に《風景》が、昭和5年(1930)の第2回聖徳太子奉賛美術展に《雪》が入選。また、昭和4年(1929)の第1回新樹社展に《雪》《早春》を、翌年の第2回新樹社には《晩春風景》を出品した。

伊藤仁三郎は明治38年(1905)11月19日、京都市に生まれる。旧姓は大西。大正12年(1923)12月、美工日本画科を卒業し、卒業制作《少女像》は同校買い上げとなる。艶やかな衣装による中国趣味と細密な人物表現を示す。昭和2年(1927)、絵専卒業。その後土田麦僊に師事し、山南塾に入る。昭和6年(1931)に洋画家伊藤久三郎の妹久子と結婚して伊藤姓となる。昭和9年(1934)の再興院展第21回展に《栽松風景》が入選するが、山南塾を活動の場とする。律動感のある風景描写をした。

要樹平は明治39年(1906)4月10日、大阪市に生まれる。旧姓是水田、本名は栄蔵。長兄に水田竹圃、次兄に水田硯山の南画家を持つ。大正13年(1924)3月に美工を卒業し、4月に絵専へ入学。美工卒業制作の《兵営附近》が第4回国展に入選する。奇抜な画面構成に早熟な才能を示した。この頃より土田麦僊に師事。昭和2年(1927)に絵専卒業後、研究科に進み昭和6年(1931)に終了。国展では、大正14年(1925)の国画創作協会第1回春季展でも《風景》が入選し、続いて翌年の第5回国展に《深草風景》が、昭和3年(1928)の第7回国展に《風景》が入選する。堅牢な画面構成と量感に富む対象表現をなした。また帝展においても、大正15年(1926)の第7回帝展に《深草風景》が入選以後、昭和11年(1936)の改組第1回帝展《雪雲未霽》までに8回の入選歴を誇った。

林司馬は明治39年(1906)4月29日、京都市に生まれる。大正13年(1924)に美工を卒業。卒業制作《花鳥図》は学校買い上げとなる。同年4月に絵専に進み、土田麦僊に師事。大正14年(1925)の国画創作協会第1回春季展に《茶樹双鳥図》が入選後、昭和2年(1927)の第6回国展に絵専卒業制作《山茶花》が、翌年の第7回国展には《花鳥図》が入選する。大正期は形態の量感を重視した濃密さを、昭和期に入り線描表現の繊細さを示した。また昭和2年頃より入江波光の指導を受け模写を始める。昭和5年(1930)の第2回新樹社展に《梨花》などを出品。同年の第10回帝展に《梨花》が入選以後、帝展に出品を続け、昭和11年(1936)の改組第1回帝展《牡丹》は政府買い上げとなった。また昭和9年(1934)の大礼記念京都美術館展《舞妓》は京都市買い上げとなった。麦

僊ぼりの華麗な花鳥画と鮮麗な舞妓図を描いた。

これら6人の経歴に若干の差異はあるが、国展の後半の大正13年(1924)頃から画壇に登場し、昭和3年(1928)の国展解散後は主に帝展に出品した新進気鋭の日本画家たちであった。ほとんどが絵専を卒業する時期にはすでに土田麦僊に師事している。麦僊が主宰した山南塾は、彼が大正12年(1923)5月に欧州芸術巡礼から帰国したのち、当初美術研究所として発足したもので、後に山南社とし、さらに山南塾と改めた。

土田麦僊の談話(「熾烈な研究心に富む門生を抱擁する山南塾〈画塾めぐり〉」『美術日報』大正15年11月17日)によると、研究会について「毎月六角会館に作品を持ち寄つて午前中塾員同志で批評研究をなし、午後自分が出席して指導することになつてゐる。此研究会に出品した作品が国展や、太子展に出品して入選しているので可なり緊張した気持で作品も自然研究的な努力されたものが集つて来る」と述べている。またこの談話で、国展と帝展で活躍する水田樹平(要樹平)の名を、麦僊はのちの柏舟社のメンバーで唯一挙げてゐる。麦僊は、昭和3年(1928)の国展解散後、山南塾生を主要メンバーとする国展の後継団体新樹社を設立させる。この新樹社は帝展や再興院展に参入するための試作展の意味合いが強かったが、すでに山南塾がその役割を果たしていたといえる。

山南塾については、昭和7年(1932)1月に丸岡比呂史(1892～1942)が編纂した『山南塾一覧』という小冊子がある。これには細かな塾規則、評議員など役員、塾員氏名住所が一覧として纏められている。この塾員名簿には、柏舟社6名の氏名が都合73名の塾生とともに記されている。

なお、山南塾は昭和11年(1936)の麦僊逝去後に解散した。今回論じている柏舟社とは別に、吹田草牧(1890～1983)など旧塾員11名が昭和14年(1939)10月に結成した「山南会」が後継組織としてある。この山南会は昭和15年(1940)7月に京都市美術館、8月に東京府美術館で第1回展を開いたのち、同17年(1942)の第3回展まで活動を続けた。ほぼ同時期に活動した柏舟社と山南会が、国展と同様に東京と京都の両方でともに展覧会を開くところに、国展やそれを先導した師土田麦僊に対する強い思いが感じられる。

この山南会の活動に関しても、柏舟社との比較において改めて考える必要がある。

(3) 柏舟社の設立とその活動

柏舟社の具体的な活動は、昭和14年(1939)1月10日から14日まで銀座松坂屋で開催された柏舟社第1回日本画展から始まる。

新見虚舟の自書経歴や回顧談によると、昭和11年(1936)6月10日の土田麦僊死去を受けて、同年の11月に塾生の同志、要樹平、伊藤仁三郎、林司馬、

澤田石民、梅原藤坡、新見虚舟の6名にて、柏舟社の自主研究会を組織したとされる。しかし、実際には昭和13年(1938)の12月に柏舟社を結成して展覧会の開催を決めたようである。これに基づいて、柏舟社第1回日本画展の案内が出されている。案内状には次のように記されている。

故土田麦僊先生の門下に在つて齊しく薫陶を享けた私たち六人は先生没後も各自研鑽に努めて参りましたが元来私達は周囲から何等の拘束や制肘を受けずに自由に各自の立場で作画を楽しみ自己を深めて行きたく思つて居る者です此度研究と発表の機関として柏舟社を組織しその第一回展を先の通り開催することになりました御清覧を得ば幸ひに存じます

この文面にある「周囲から何等の拘束や制肘を受けずに自由に」ということは、新文展などの公募展に今後出品しないとの意思表示でもあったと虚舟は語っている。この設立の宣言は、戦後に至っても彼らの発表活動に長く拘束を与えることにもなる。なお「柏舟」という言葉は、『字源』（昭和30年版 角川書店）に「柏舟操」として「柏舟は詩経の篇名、衛の太夫共伯の妻共姜が、夫の死後、操を守りて再嫁を肯んぜずして作る、よりにて夫死して婦節を守るにいふ」とある。つまり、師土田麦僊に操を立てるという意であった。

柏舟社は、この案内状に見られるように、いわば退路を断つてこの同人展に全精力を傾けたのである。その詳細な展覧会歴については別項に纏めた。短期間に頻繁に展覧会を開催している。記録に残るだけで、昭和14年(1939)に4回、同15年(1940)に6回、同16年(1941)に2回、同17年(1942)に5回、そして戦後の22年(1947)に1回の計18回の展覧会を開催している。また別項に付記したように、二科会の洋画家たちとの合同展「三三美術団展」が昭和17年(1942)9月と翌年(1943)9月の2回開催されており、これを加えると総計20回の展覧会歴となる。

この中には、小品展や同人三人展など小規模な展覧会もあり、主要なものは昭和14年(1939)1月の柏舟社第1回日本画展、同年9月の大阪松坂屋美術画廊の柏舟社絵画展覧会、同15年(1940)10月の東京資生堂画廊の柏舟社第2回展覧会、そして同17年(1942)3月の東京資生堂画廊の第3回柏舟社絵画展である。それぞれの会場で開催された展覧会が、若干作品を補足して、名古屋や京都、そして神戸などの都市に巡回するというものであった。

この柏舟社の展覧会の特徴の一つに、会場を松坂屋など百貨店の美術画廊を主会場としているところがある。百貨店で在野の展覧会を開くことは、大正7年(1918)の第1回国展が東京の白木屋で開催されたこともあり、特別な事例ではない。ただし、国展も東京府美術館が整備された後は会場を移しており、基本的には公募展などは陳列施設での開催が主であった。その中で柏舟社が百貨店の美術画廊を主会場として展覧会を開催したのは、いくつかの理由がある。一つに、国展解散後の新樹社展の出品作品にも見られる傾向であるが、「会

場芸術」的な大作から「床の間芸術」的な小品への変化があげられる。あわせて、大正時代後半の国展作品にみられた細密な風景表現や官能的な女性表現は、昭和初期には影を潜め、次第に古典的な題材による温和な作風が好まれるようになる。日本画は床の間を意識した商品という性格を強めていく。もちろん、柏舟社展の作品も商品であった。

また一つに、このような日本画に対する好みの変化を背景として、各百貨店が東西を代表する日本画家を選抜した企画展を次々に開始したこともある。大正13年(1924)から始まる三越の「淡交会」展以後、高島屋や松坂屋なども、季節ごとの画題による東西画家展を頻繁に繰り返すようになる。そして百貨店だけでなく、美術商や表具屋などが主催する展覧会も活発となり、時代の閉塞感とは裏腹に日本的な美が求められ、それに日本画家たちが応えていく。そして、柏舟社が展覧会場を松坂屋としたことの要因として、昭和13年(1938)2

月に銀座松坂屋を会場とする関尚美堂主催の「清尚会」に林司馬が東西11名の新鋭画家の一人として選ばれており、同人展を開催する縁故がすでに松坂屋との間であったこともあげられる。

またもう一つの特徴として、開催毎に各作品の絵葉書を作成しており、具体的な出品内容がほぼ確認されることである。この当時の他の同人展の事例を細かく把握していないが、吹田草牧らの山南会展も出品作品が絵葉書からほとんど確認される。柏舟社展の出品作品を紹介する商品カタログの意味合いで、松坂屋が制作したのであろうが、中堅画家の同人展としては意外な気もする。

さて、柏舟社第1回日本画展の具体的な内容を見てみたい。伊

藤仁三郎が《春の溪》など5点、梅原藤坡が《夏野》など5点、要樹平が《山茶花》など6点、澤田石民が《霜》など5点、新見虚舟が《老君(朝鮮所見)》など5点、林司馬が《白木蓮》など4点、それぞれが5点前後出品している。現存する木村定三コレクションの梅原藤坡《夏野》(挿図2)の横幅が二尺足らず、また縦幅の《初冬好日》(挿図3)も一尺五寸ほどであり、床の間に映える大きさである。題材についても、四季の風景や花鳥に基づくものがほとんどで、新見虚舟の朝鮮所見にしても土田麦僊に倣うもので、特に個性的とはいえない。このような全体的な特徴を見ると、美術愛好者を意識した売り絵に過ぎなかったのかという印象を持つが、個々の作品はそれぞれの画技の高さが発揮されたものであった。

ただし、麦僊門下でありながら、伊藤仁三郎と澤田石民には入江波光(1887～1948)や村上華岳(1888～1939)、梅原藤坡には小野竹喬(1889～1979)、林司馬には入江波光の影響がそれぞれに見受けられる。この第1回展について、美術記者本田純一がまず挨拶状の文章にふれて「柏舟社を結成して展覧会を開いた以上拘束や、制肘を必らず受けるのである。(中略)絵が荒れては困るが、消



挿図2 梅原藤坡 《夏野》 昭和14年
絹本着色 軸装 43.0×56.7cm
柏舟社第1回日本画展



挿図3
梅原藤坡 《初冬好日》 昭和14年
絹本着色 軸装 130.2×42.2cm
柏舟社第1回日本画展

極的な、茶室趣味的な小味に入つて行つても、私達には困るのである」(「柏舟社第一回展」『美之國』15-2 昭和14年2月)としたうえで、「一覧して、何んだか、入江波光、村上華岳、小野竹喬、麦僊、徳岡神泉達の特徴を真似てゐる様なところが餘りに見えて、物足らなかつた」と指摘した。

このような影響関係の指摘は、その後の柏舟社展に対する美術批評にたびたび登場する。その中で、国展時代以来柏舟社の画家たちに注目してきた美術評論家豊田豊は、昭和15年(1930)10月の柏舟社第2回展覧会にふれて「柏舟社は京都・東京共に中央の大美術館を舞台とした規模の大きい社会運動的な山南会とは相違して彼の会場芸術的な性格に対してより小規模な鑑賞芸術的に地道なだが真摯な精進ものであった」(「柏舟社第二回展」『塔影』16-2 昭和15年12月)と好意的な見解を示した後、「山南会の人達が故麦僊の直接伝統を継承して、麦僊の間口の広い派手好きな会場芸術的意欲の旺盛な人達の同好の集まりである時、この柏舟社の人達はどちらかといふと麦僊からの影響よりも故村上華岳や入江波光の同じ旧国展同人の鑑賞芸術主義、古画品趣味の感化を受けて何等かその新時代を画さうとする人達の集ひである」とした。おそらく、一般鑑賞者のなかにも本田や豊田と同様の感慨があつたと思われる。

ここで、柏舟社展全般に出品された作品の個別の内容についてもふれるべきであるが、今回は木村定三コレクションの紹介を主眼としているので、それらの作品について述べたい。

(4) 木村定三コレクションの柏舟社作品

木村定三コレクションの柏舟社関連作品は6点で、梅原藤坡が4点、澤田石民が1点、林司馬が1点である。

まず藤坡作品は、先にもふれたが、昭和14年(1939)1月の柏舟社第1回日本画展出品の《夏野》(挿図2)と《初冬好日》(挿図3)、同年9月の柏舟社絵画展覧会の《細雨耕田》(挿図4)、そして出品歴が不明の《鐘馗》(挿図5)である。木村定三は、これらの作品のうち《夏野》と《初冬好日》は昭和14年2月21日から23日に名古屋松坂屋美術部で開催された柏舟社第1回日本画展で購入し、《細雨耕田》は目録など資料の裏付けはないが、昭和15年3月7日から10日の名古屋松坂屋六階美術画廊で開催の柏舟社絵画展覧会で入手したと思われる。《鐘馗》についての入手経緯は不明である。なお、伊藤仁三郎のメモに東京と名古屋の柏舟社第1回日本画展出品作品の価格が記されており、《夏野》が東京での250円が名古屋では150円、《初冬好日》はいずれも150円となっている。

また石民作品の《緑蔭繫牛》(挿図6)は、昭和16年(1941)9月18日から21日の名古屋松坂屋六階美術部画廊で開催された第3回柏舟社絵画展覧会の出品作品である。そして司馬作品の《雪》(挿図7)は、現在のところ制作年も出品歴も



挿図4 梅原藤坡 《細雨耕田》 昭和14年
絹本着色 マクリ 44.7×57.8cm
柏舟社絵画展覧会



挿図5 梅原藤坡 《鐘馗》 制作年不詳
紙本墨画淡彩 軸装 59.8×33.0cm



挿図6 澤田石民 《緑蔭繫牛》 昭和16年
紙本着色 マクリ 49.1×54.4cm
第3回柏舟社絵画展覧会



挿図7 林司馬 《雪》 制作年不詳
絹本着色 マクリ 44.5×51.5cm

確認できない。

個々の作品のうち藤坡の《夏野》は、夏の涼やかな風が吹く野に白馬と黒駒を描く。浅緑色を用いた繊細な線描が弱いながらも存在感を持つ。また《初冬好日》は、晩秋の山間、落葉した木々の間から焚火の煙が立ち上がる。休息する農夫らの佇まいとともにしみじみとした情感が漂う。そして《細雨耕田》は、小雨の田圃で牛に鋤を引かせて田起こしをする場面を描く。描線を用いず墨の濃淡と淡彩の効果によって、田植え前の田圃の風情を素朴に捉えている。さらに《鐘馗》は、墨のわずかな諧調を用いた量感表現を行い、筆遣いの巧さを示している。これらの藤坡作品のうち《夏野》と《初冬好日》には小野竹喬の昭和10年(1935)頃の画風が重なり、《細雨耕田》と《鐘馗》には入江波光の模写から学んだような古画の味わいを認める。

また石民の《緑蔭繫牛》は、初夏の樹林の中で繫がれた牛の姿を描く。柔ら

かな墨の諧調と浅緑色の彩色がほどよく調和して深みのある画面が得られている。そして司馬の《雪》は、雪が降り積もったばかりの竹に丸々とした雀が止まり、わずかに囀る。背景を無地とした竹と雪と雀という少ない道具立てで、緊張感のある瞬間をさらりと捉えている。この二人の作品にも、題材と技法の両面で入江波光の影響が強く認められ、村上華岳の花鳥・動物表現から学んだ筆法も認められる。

木村定三の近代日本画のコレクションを見渡すと、古画に依った技能の高い作品を選んで蒐集しているように思える。特に線と墨の表現を重視している。土田麦僊や村上華岳の作品も蒐集した木村定三が、いかなる認識を持って柏舟社のこの三人の作品を入手したかは判然としない。名古屋の松坂屋で目にしたであろう、蒐集対象とならなかった伊藤仁三郎や要樹平、そして名古屋出身の新見虚舟の作品はどのように彼の眼に映ったのであろうか。木村定三の琴線にふれた藤坡、石民、司馬の作品に共通した要素は指摘しがたいが、見得を切らない率直な表現の在りように好感を持ったようにも考えられる。

木村定三の審美眼の深さは容易に見極めがたい。しかし、柏舟社というささやかな同人展の活動にまで目配りをしていたことに、木村定三の美を楽しむ心の温かさを私は感じる。

柏舟社の展覧会歴

2010年2月1日現在

(笠岡市立竹喬美術館 上藺四郎作成)

○柏舟社第一回日本画展

昭和14年1月10日～14日

銀座松坂屋七階会場

*目録あり

網点作品は図柄判明

□は絵葉書あり

△は現存作品

伊藤仁三郎 《春の溪》 《飛鹿》 《苔庭雨情》 《朝靄》 《雨餘》
 梅原藤坡 《夏野》△ 《青柿》△ 《飛燕》 《梅ノ宮》 《初冬好日》△
 要樹平 《山茶花》 《南天》(注1・二尺巾) 《南天》(注1・尺八) 《芍薬》
 《梅もどき》(注1・二尺巾) 《梅もどき》(注1)
 澤田石民 《霜》 《雀》 《瀧》 《鯉》 《雪》
 新見虚舟 《老君》(朝鮮所見) 《南鮮風趣》 《洗剣亭》 《不動》 《談》
 林司馬 《白木蓮》 《雪中鴛鴦》 《白梅》 《娘》

注1：伊藤仁三郎のメモ

○柏舟社第一回日本画展

昭和14年2月21日～23日

名古屋松坂屋美術部

*目録あり

伊藤仁三郎 《朝靄》 《春の溪》 《苔庭雨情》
 梅原藤坡 《青柿》 《飛燕》 《桜二題》 《夏野》 《初冬好日》
 要樹平 《山茶花》 《南天》 《芍薬》 《梅もどき》
 澤田石民 《瀧》 《雀》 《鯉》 《霜》 《雪》
 新見虚舟 《愛染明王》 《老君》(朝鮮所見) 《牧童》 《洗剣亭》(朝鮮所見)
 林司馬 《白梅》 《青梅》 《さくら花》

○柏舟社小品展

昭和14年9月19日～25日

京都丸物五階美術部

*目録なし 内容不明

○柏舟社絵画展覧会

昭和14年9月26日～30日

大阪日本橋松坂屋六階美術画廊

*目録なし

一作家三点くらいの予定(『日本美術新聞』9月23日)

網点作品は図柄写真あり(確定に及ばず)

△は現存作品

『大阪朝報』9月30日記事による

伊藤仁三郎 《山》 《瀟雨》 《日照雨》

梅原藤坡 《石山名月》(注1) 《細雨耕田》△ 《保津漕舟》△ 《愛宕夕輝》
《嵐山春雨》

要樹平 《盛秋》 《柿》 《山雀》 《月》

澤田石民 《秋林》 《霜》 《松山》 《芍薬》

新見虚舟 《雨後》 《秋日》 《冬の朝》 《山雨》

林司馬 《蓮花》 《涼風》 《鶉》 《雪中鴛鴦》 《鮎》

注1：梅原藤坡記録によると《石山月明》

○柏舟社展覧会

昭和15年2月16日～18日 京都朝日会館画廊 *目録なし 網点作品は図柄判明

□は写真あり △は現存作品

『塔影』昭和15年5月号より

伊藤仁三郎 《叢樹》(注1) 《遊鹿》

梅原藤坡 《夜桜》(注2) 《池塘蘭春》

要樹平 《凍雲》 《寒樹喬》

澤田石民 《晴雪》 《霜晨》

新見虚舟 《佛巖峰》 《普賢峰》

林司馬 《立花図》△ 《虫》

注1：『美術と趣味』第5巻3号では《叢林》

注2：『美術と趣味』第5巻3号では《篝火》

○柏舟社絵画展覧会

昭和15年3月7日～10日 名古屋松坂屋六階美術画廊 *目録なし

○柏舟社同人三人展

昭和15年4月13日～18日 大阪阪急百貨店六階美術部 *目録あり

網点作品は図柄判明

梅原藤坡 《白き花》絹尺五横 《黒獅子》絹尺巾横 《筏》絹尺五横(注1)(注3)

《花曇》御空紙二尺横 《夜桜》絹尺八横(注2)

要樹平 《佳禽交来》絹尺五横 《霜晨》絹尺八横 《芍薬》絹尺五横

《樹林暗》絹二尺横(注2) 《梅》絹尺五横 《春雪》絹尺八横

伊藤仁三郎 《烟江斜陽》絹尺八横 《松鷄図》紙尺五巾 《春山鳴泉》絹尺三豎
《蕉茄》紙二尺三寸横 《秋鹿》絹尺八横(注2)

注1:『塔影』昭和15年6月号には《奔湍輕舟》とあり

注2:案内状に図柄あり

注3:『塔影』昭和15年6月号に図柄所載

○柏舟社同人三人展

昭和15年5月18日～19日 京都朝日会館画廊 *目録なし 網点作品は図柄判明

『塔影』昭和15年7月号より

要樹平 《緑陰》 《霜晨》 《蔬菜》 《芍薬》(注1)

澤田石民 《寒泉》 《叢間》 《芽立つ村》(注1) 《伐木》(注1)

新見虚舟 《香落溪》 《雪旦》 《北漢山》(注1) 《佛巖洞》(注1)

注1:『美術と趣味』第5巻6号所載

○柏舟社第二回展覧会

昭和15年10月17日～19日 東京銀座資生堂画廊 *目録なし 網点作品は図版判明

☐は絵葉書あり

『塔影』昭和15年12月号より

伊藤仁三郎 《月華幽暗》 《竹林》

梅原藤坡 《奈良の森》 《月桜》

要樹平 《叢苑晩夏》 《鳶》 《枇杷》(注1)

澤田石民 《寒泉》 《山》

新見虚舟 《幽寂飛泉》 《雨霽》

林司馬 《鶉》 《宮詣で》

注1:『観光美術』第3巻11号に記載 《叢苑晩夏》の誤記か

○柏舟社展覧会

昭和15年12月2日～4日 京都朝日会館画廊 *目録なし

各誌によると東京展と同一内容

○柏舟社日本画展

昭和16年5月27日～29日 大丸京都店六階 *目録なし

○第三回柏舟社絵画展覧会

昭和16年9月18日～21日 名古屋松坂屋六階美術部画廊 *目録なし
網点作品は図柄判明 □は絵葉書あり

『国画』昭和16年12月号による

伊藤仁三郎 《山》

梅原藤坡 冬の海 (注1)

要樹平 《松》 《金魚》

澤田石民 《緑蔭繫牛》△

新見虚舟 《観音峰》 《瀧》(注1)

林司馬 《茄子》

注1：梅原藤坡所有の写真資料による

○柏舟社日本画展

昭和17年1月20日～25日 神戸大丸5階別室 *目録なし

○第三回柏舟社絵画展

昭和17年3月11日～14日 東京銀座資生堂画廊 *目録なし 網点作品は図柄判明
□は絵葉書あり

伊藤仁三郎 《禅庭弧月》 《春山》

梅原藤坡 《夜桜》 《牡丹》

要樹平 《月照梅》 《鳩》

澤田石民 《雉》 《鴝》

新見虚舟 《崖》 《幽壑懸泉》

林司馬 《倭鶏》 《獅子舞》

○第三回柏舟社絵画展

昭和17年4月 期間不明 京都河原町三角堂 *目録なし
『芸術新聞』4月25日号に東京展と同一作品とあり

○(仮称)京城柏舟社展

昭和17年5月20日～24日 京城(ソウル)三越 *目録なし

「東西中堅作家日本画展」に柏舟社六名が²参加

○柏舟社絵画展覧会

昭和17年10月27日～11月1日 大阪高麗橋三越 *目録なし

『京都新聞』11月3日によると18点出品とあり

梅原藤坡 《新樹の谷》 《田植》

要樹平 《松月》

林司馬 《川魚》 《矮鶏》

○(仮称)澤田石民遺作展並びに柏舟社近作画幅展 京都第四回展

昭和22年5月17日～18日 京都金閣寺 *目録なし

三三美術団展の展覧会歴

○第1回三三美術団展

昭和17年9月19日～25日 東京上野竹の台日本美術協会 *目録あり

網点作品は図柄判明 ☐は絵葉書あり

伊藤仁三郎 ☐《猪》 《山畑》 《萬壑図》

要樹平 《菊》 《柘榴》 《吾家の柘榴》 ☐《晩秋》 《猫と蔬菜》

梅原藤坡 ☐《戸隠》 《新樹の谷》 ☐《田植》 ☐《桜椿》

澤田石民 ☐《猿》 ☐《秋山》 《鳩》

新見虚舟 ☐《萬瀑洞》 《法起庵》 《普徳窟》 《雲山図》 《峠路(咸鏡洪君里)》

〈海軍献納画〉

伊藤仁三郎 《蔬菜》 《静物》

林司馬 《舞妓》

要樹平 《兎》 《猫》 《案山子》 《子供》 《三毛》

梅原藤坡 《鯉のぼり》

澤田石民 《ダリヤ》 《茄子》

新見虚舟 《山》

○第2回三三美術団展

昭和18年9月6日～13日

東京上野公園桜ヶ丘日本美術協会 *目録あり

網点作品は図柄判明 □は絵葉書あり △は作品現存

伊藤仁三郎 《森》 《秋老(鹿)》 《戸隠快晴》

新見虚舟 《雪の山》 《北鮮風趣》 《伐材》 《雪の山》 《北鮮の山》 《若葉の山》

澤田石民 《夏の山》 《水辺》 《竹林》△

梅原藤坡 《朝陽(松連作一)》 《老幹(松連作二)》 《雷雨(松連作三)》

《秋崖(松連作四)》 《濱海(松連作五)》 《緑の舞》

要樹平 《柘榴》 《竹石の図》 《松月》 《秋韻》

林司馬 《七夕図絵(一)近衛の花使》 《七夕図絵(二)池の坊立花》

《七夕図絵(三)町屋の七夕》 《七夕図絵(四)川流》